

1 まず、島民の意思に基づいた、島民が中心になった活動であること。強い信頼関係を築くこと

外部の私たちが「こうあるべきだ」というしっかりとした思いを持つことは大切です。しかし、カオハガンの歴史、育んできた暮らしの文化、そして、今、そこに住む住民たち自身が何を考え、何を望んでいるのか、を十分に話し合い、理解し、同意をした上で活動をするのが、何にも増して大切と考えています。

カオハガン島には、公選された村長、村会議員がおり、かつ伝統を受け継いだ知恵を持ち、皆から尊敬を受けているお年よりたちがいます。そんな村人たちと定期的に相談し、かつ、村の若い人たちの意見も聞きながら、進むべき道、活動の内容を決めています。

私たちは島民たちの「暮らしの文化」から学ぶ態度を持ち、同じ目線の暮らしをし、島民たちと一体になってカオハガンの現在、将来を考えてきました。その結果、島民たちとの間に心からの信頼関係を築くことができたと思っております。

この深い信頼が、このようなプロジェクトを行ううえで「最も大切なこと」と思っているのです。*

2 島に暮らす人たちの「基本的な必要(ニーズ)」を満たすこと。

2 1 衛生関係

a) 生活用水を確保しました

島には、もちろん水道は引かれておりません。井戸を掘っても海水しか出ません。島民たちは生活用水をすべて雨水に頼っていました。しかし、島の降雨量は少なく、特に4月、5月の乾季には水がなくなってしまいます。そんな時、島民たちは高い対価を払って、マクタン島や井戸水の出る近隣の島から水を得ていたのです。

各家庭の屋根にブリキの「とい」を取り付け、そして、セメントをつかって、自分たちで大きな(直径一メートル以上の)水瓶をつくることを指導し、生活用水を確保しました。

乾季が続くと、まだ水を買っています。が、その量は非常に少なくなりました。*

b) トイレをつくりました

島にはトイレというものがなく、島民は海、海岸、茂みなどで用を足しておりました。私たちは、3棟の共同トイレ(各々4個の便器を備え、合計で12の便器です)を作りました。

トイレの前に海水の井戸を掘り、各自で汲み上げて水洗する方式です。三層の浄化装置も設置しました。今では 100%の島民がトイレで用を足すようになっています。

この結果でしょうか、以前に何度もあったと聞いている、伝染性の病気の発生がまったくなくなりました。*

c) ゴミの処理を考え、島がきれいになりました

島民は、ゴミのほとんどすべてを、海に投げ込んで捨てていました。

ゴミを数ヵ所に集め、燃やしていいゴミ、燃やしてはいけないゴミを分別し、燃やすゴミは燃し、そうでないゴミをマクタン島のゴミ処理場に運んで捨てています。

また、島民たちが毎日交替で、島全体の清掃をするようになりました。

島が見違えるようにきれいに、清潔になりました。*

2 2 教育関係

a) 子どもたち全員が、島で、小学校の教育を終えられるようにしました

1987 年当時、島では小学校 2 年までの授業が行われ、それ以降は隣のパンガナン島の学校まで毎日海を歩いて通わなければなりませんでした。そのため、ほとんどの人が、その段階で学校に通うのを止めてしまっていたのです。

島に校舎を建て、当局(日本の文部科学省に当たる省、のセブ支部)と交渉し、1994 年より島で正式な公立の小学校の教育が始まり、6 年生までの授業が行われるようになりました。今では島の 100%の児童が 6 年の小学校教育を終えています。*

b) 奨学金の制度をつくり、ハイスクール、大学への進学を開きました

1996 年より、成績が良くて意欲のある生徒に奨学金を与え、上級学校に進む道を開きました。(フィリピンの学制は、小学校 6 年、ハイスクールが 4 年、そして大学が 4 年です)。

今までに(2005 年 2 月現在)3 人が大学を、11 人がハイスクールを卒業しています。そして、現在、21 名の生徒がマクタン島、セブ島などにあるハイスクールに通っています。それから、ハイスクールを卒業した者の内、ひとりが、日本の「立命館アジア太平洋大学」に留学、ひとは、セブの医科大学(Cebu Doctors College of Allied Medical Science)に進学しております。その他 4 名がセブの大学で学んでいます。

大学、ハイスクールの卒業生のうち 3 名が職を得て働いています。

しかし、残念ながら、7 名の生徒が大学、ハイスクールを中退してしまいました。今後は、職業訓練校への進学も積極的に進めていく予定です。

c) 環境教育をしています

島民たち全員を対象に、島の自然環境を守ること、そして島の伝統的な暮らしかた、価

値観などを守っていくことの大切さを教え、皆で考えています。(後述の、5 項「村会関係環境」、そして「これから重要と考えている活動」を参照してください)

d) 島で誇りを持って生きていくための環境づくりをしています

島の半数以上の若者たちは、小学校 2 年までの教育しか受けていません。まったく教育を受けていない人もたくさんいるのです。

そんな若者たちが、カオハガン島で、誇りを持って、ゆったりとした楽しい暮らしを一生続けられるように、信頼、互恵性に基づく、差別のない「社会関係環境」を重視し、自然と密着したシンプルな暮らしを勧め、また、職業訓練を続けています。

e) 本に親しんでもらい、視野と情操を広げたい

カオハガンの人たちは「本を読む」という習慣を持っていません。子どもたちに良い本に親しんでもらい暮らしの視野や情操を広げてもらうため、図書館をつくり軌道に乗せたいと思うのですが、なかなか思うように進んでおりません。専門の係りの者を育成したり、本を読み聞かせる時間をつくったり、現地の言葉への翻訳をしたりして、今後も努力を続けます。

また、カオハガン独自のミュージカルを、年一回、島で公演しています。現在では、脚本、演出、衣装などほとんどすべてが子どもたち自身の手で行われるまでになりました。

2 3 医療関係

a) 島民が病気になったとき、できるだけの援助をしています

付近の島々には「マナナンバル」というローカルな医者があります。地元で生えている草木を処方して治療をしたり、マッサージ、場合によっては祈祷のようなこととして島民の病気を治してきました。そして、このマナナンバルへの支払いは、「患者が払えるだけの金額を払う」ということで済んだのです。

島民はこのマナナンバルに頼り、大きな病いにかかった時でも病院に行くことはありませんでした。そして、現実的に、彼等には、それ以上どうする術もなかったのです。セブには立派な病院がありますが、医者にかかったり、薬を買ったりするお金が島民にはありません。島民が容易に加入できるような医療保険の制度もありません。

2 歳になるまでの子どもの 3 分の 1 近くが亡くなり、分娩の際に命を落とす母親も多かったのです。

今では、島に常備薬を備えておき、また、ミドゥ・ワイフ(予防注射などができる資格を持った保健婦のような人)をひとり、私たちが費用を支払って島に常駐してもらい、軽い病気は島内で処置しています。そして、重い病気にかかった島民は全員セブの病院に連れて

行き、治療を受けさせています。その治療費、薬代の大部分は、私たちが支払っております。

その結果、病死する人の数は激減いたしました。

その地、日本の歯医者さんのグループにお願いし、年に二回、定期的に歯科の診療を続けていただいています。

b) 島に伝わる草木を使った療法を生かしています

島の暮らしに密着したマナンバルの療法を大切にし、それに学び、草木を利用した伝統的な療法を続けることを奨励しています。

また、私たちの日常の食事にも、このような草木の薬効を取り入れるよう心掛けています。長年、島民が薬として使ってきた、ニーム、ノニ、ハイビスカスなどの葉、実、花を利用して、お茶、食後酒などを試作しています。将来は商品化を考えております。

3 経済社会の構造の変化に柔軟に対応するため、地元に立脚した、ユニークな収入源をつくる

「自給自足」「交換」をベースにしていた素朴な島民たちの暮らしの経済に、現金の必要性が増えてきました。

外部からの「資本」に従属させられないように、また楽しみながら現金収入が得られるように、島に密着した、量ではなく質にこだわった、楽しい、ユニークな「仕事」を工夫しています。

同時に、島民がモノへの欲望をドンドンと広げてしまわないように、「シンプル・ライフ」を勧め、物質ではない人間本来の喜びの大切さを話し合っています。

3 1 「キルト」をつくり始めました。そして、高い評価をいただいています

パートナーの順子は日本で大きなキルト・スクールの校長をしていました。1992 年頃より島の子どもたちに「キルト」つくりを教え始めたのがきっかけで、島に独特のスタイルのキルトが育ってきました。自由な色づかいとデザインの「カオハガン・キルト」が専門家、愛好者のあいだで高い評価を受けるまでになりました。

日本で開かれるキルト展示会に、毎年、招待を受け、展示され、その会場や島を訪れる人たちに販売されています。

今では、布の仕入れ、管理、制作、経理などのほとんどを島民たちが自主的に運営できるまでになりました。そして、キルトからの収入が島の総現金収入の 40% 近くにまでなっているのです。

これといった趣味のなかった島の主婦たちが、島のあちこちで、楽しそうにカラフルなキルトをつくっています。*

3 2 島で昔からつくられていたクラフトに新しいデザインを加えました

ロムロム(パンダナスの一種)という草の葉を乾かし、割いて編んだクラフトが、島ですっとつくられ続けてきました。が、後継者がなく、伝統がとぎれる寸前でした。

新しいデザインを取り入れ商品価値を高めた結果、若い人たちのあいだでもクラフトづくりが盛んになっています。ゴザ、ランチョンマット、敷物、コースターなどをつくって島の土産品として販売をしています。

そのほか、木工を教え、流木、竹などをつかい、風土に沿った、風車、彫刻、食器、椅子などがつくられています。*

3 3 島の宿泊施設「カオハガン・ハウス」で働いてもらい、近い将来の自主運営に備えてトレーニングをしています

島で、質素な、現地のスタイルの 7 部屋の小さな宿泊施設を運営しています。マネージャー、船長、料理長を含め、20 数人の島民に働いてもらっています。島氏にとって初めての、そして唯一の、しっかりとした定期収入です。

今まで数年にわたって、ホテル運営の技術、専門技術、外国語などを教えてきました。現在、島民たちだけの手でほとんどの運営が可能になりました。2011 年には、すべての運営を島民たちにまかせることができるよう、これからも準備を進めます。

4 豊かな自然環境を保護すること

何と言っても、島の豊かさの根源は、自然環境のうつくしさ、豊かさです。これを保護することがすべてに優先しなければ、と考えています。

4 1 ダイナマイトや毒を使った漁をなくしました

近隣の漁師のあいだでビジネスとしての漁業が始まって、漁獲高を上げるため、ダイナマイトを珊瑚礁の浅い海に投げ込んだり、海に毒を流す漁が盛んになりました。魚の住家である珊瑚礁が破壊され、魚が減ってきました。

この漁法はフィリピンの法律で禁止されているのです。

島民たちと協力し、取締を厳しくし、今では、カオハガン近海でこの違法な漁法で漁をするものはほとんどいなくなりました。

魚の数は確実に増えています。*

4 - 2 フィッシュ・サンクチュアリーをつくります

島民たちと相談し、ラブラブ市当局と協力して、現在、「フィッシュ・サンクチュアリー」の設置を進めています。

外洋に開いた、リーフに沿った海域の一部での漁を制限します。リーフの外側一帯(水深2~40メートルくらい)を禁漁区域に、内側(水深2メートル以下)をカオハガンの島民が自分たちの食料を得るために漁をする海域とし、海洋資源を保護、育成します。

2005 年末までには、完成、実施の予定です。

4 3 木をたくさん植えました

島民に、やたらに木を切ることを自制してもらい、同時に、島に自生していた草木をたくさん植え、増やしました。

ココ椰子(果汁を飲み、ココナツを採り、漁、酢、酒をつくり、そして、建材、薪などに、すべてが利用されている木)、ニームやノニ(昔から、根、実、葉が薬として使われている木)、タリサイ(大きな木陰をつくる木)、クリス(葉が食用になる木)。それから、パパイア、ジャック・フルーツなどの果物、ブルメリア、ブーゲンビリア、ハイビスカスなどの花木などです。

また、島民たちが、日常、野菜として食べている、カムンガイ、ピランピランといった植物も増やしています。

今では、島全体がぎっしりと濃い緑に覆われ、その景観が一層うつくしさを増し、また、島民たちが日常の食事に、そして健康を保つために、その草木を利用しています。*

4 - 4 動物も保護しています

島には、棚子蟹、中形のとかげの「ハオ」などがたくさんいたそうです。食べるとおいしいので、島民が捕り尽くしてしまい、絶滅してしまったそうです。

10 数年前には、飛べない鳥「クイナ」が絶滅寸前でした、島民たちに捕まえないよう、いじめないよう協力を求め、今では数が増えて、チョコチョコと歩くかわいい姿をよく見掛けるようになりました。

緑も増えて、島に棲む鳥、渡り鳥、昆虫、などの種類、数も、目に見えて増えてきています。*

5 「社会関係環境」を守る

以上のように、「基本的に必要な『ニーズ』を満たすこと」「自然環境の保善」、そして、新しい「仕事」を創ること、などを目的とする活動を進めてきました。

しかし、その活動の結果を生かして、ほんとうに豊かな暮らしをするためには、その社会を構成する人たちの間に、「信頼」や「互惠性」に支えられたネットワークが張り巡らされていること、すなわち「社会関係環境資本(social capital)」が整っていることが欠かせないと思っています。

狭くて、そして、外部との交流が比較的少なかった「島」という環境に住むカオハガン

島民たちのあいだには、その深い信頼関係があり、互いに助け合いながら暮らすスタイルがしっかりと根付いていました。

そして、私たちも、それを保つようたいへんに気をつかい、島民たちとその大切さを話し合っ^てまいりました。そのことが、私たちが、島民の暮らしに、今でも、「豊かさ」を感じる大きな理由なのだと思います。

しかし、これからの新しい歩みのなかで、その信頼や互惠性の大切さが、ともすると忘れられがちになると思われます。今後も、その大切さを忘れないよう、いや、それをより高めるように島民たちとよく話し合い、しっかりと監視していきたいと思っています。

6 「すでに発展を遂げた国」に住む私たち自身の暮らしを見つめ直し、考えるために

以上のように、島の「環境」を良いものとする活動を続けています。

そして、同時に、カオハガンという「場」を、外部の、同じような価値観を持った、^{こころざし}「志」のある人々に自由に利用していただくよう、宿泊施設などを運営してまいりました。

このプロジェクトにいろいろな形で参画することによって、島民との、そして参加者どうしのお互いの理解と交流を深めてもらいたい。そして、今、この「情報化・消費化社会」の真っ直中にいてその果実を謳歌しながら、同時に、将来への不安を感じ始めている私たち自身の、「自分の『場』」での暮らし、環境を見直すことに役立ててもらいたいと考えているからです。

6 1 島民の暮らしから学んでほしいのです

島民の生き方、暮らしのなかには、私たちが、既に忘れてしまっている重要なヒントがたくさんあるのです。例えば、「大自然の循環のなかにいる自分を感じ、自然の営みを畏敬し、その恩恵を受けながらの、シンプルな暮らし」などです。

そんなことを体験しながら学んでほしい。そして、ひとりひとりが学んだことを、自分自身の暮らしに生かし、自分の住んでいる「場」「共同体」を良くすることを始めてほしいのです。

そのため、私たちは、島で小さな宿泊施設「カオハガン・ハウス」を運営しています。そこに泊まりながら、島の暮らしを体験してもらっています。

また、その宿泊施設からの利益金の全額を、今まで述べたいろいろな活動の資金としてつかっています。

6 2 良い人の輪を広げたいのです

島を訪れてくれた方が数が、すでに 2,500 人を越えています。

同じ時期に島を訪ね、知り合った方々が、日本に帰ってからも交流を続けています。そ

んななかから、1995 年に「NGO・南の島から」がつくられました。交流の会を開いたり、会報を出したりしています。

カオハガンを起点に、同じような思いを持つ人の「ネットワーク」がつくられ始めています。皆が一緒になって、上記のような諸活動を広げ、強めていきたいと思っているのです。

6-3 アジア、世界の人たちの交流の場としたいのです

今のところ、カオハガンへの来訪者のほとんどが日本人です。

2001 年、私が書いた本の 1 冊が中国語に翻訳され、台湾で出版されました。その後は、台湾からのお客が増えて、カオハガンのさわやかな雰囲気の中で、台湾、日本、フィリピンの人たちの交流が深まっています。

将来、カオハガンが、韓国、中国などアジアの人たち、そして、同じような考えを持った世界の人たちがたくさん訪れてくれる「場」となり、アジアの人たち、世界の人たちの交流と理解を深め、世界の平和に貢献できればと考えているのです。

これから重要と考えている活動

以上のように、私がカオハガン島に活動の拠点を移し、このプロジェクトがゆっくりとスタートしてからすでに 14 年が経過しました。たくさんの方々のご協力を得て、かなりの良いスタートを切り、ここまで実績を重ねることができたと思っています。

ここで、2005 年 2 月現在のカオハガンの島民の暮らしを描写してみましょう。

大型のサッカー・スタジアムほどの、周囲 360 度を白い砂浜と珊瑚礁に囲まれたカオハガン島。その東側に、島民のほとんどが住んでいる集落があります。島の中央部は緑の濃いココ概子と灌木の林が広がっています。その西側の木立ちのなかに宿泊施設のいくつかの建物が点在し、島の西端には大きな砂州が広がっています。ブルメリア、ブーゲンビリア、ハイビスカスなどの花々が一年中咲き乱れる小さな島を、さわやかな風が吹き抜けていきます。

一日に一回、朝方の潮が引いた時に、たくさんの島民が、浅い珊瑚礁の海に、手に手に小さなバケツをもって出かけます。お年寄りから子どもたちまで、海面を見つめながら、ゆっくりと磯を歩き回ります。小魚、イカ、タコ、エビ、貝、ウニ、海草、なまこなど豊富な海の幸を採ってその日のおかずにするのです。

それが終ると、掃除や洗濯、そして舟の修理をしたり、近所の人々が家をたてるのを手伝

ったり。ほとんど自給自足の暮らしです。好きな時間に、軒先や日陰でキルトを広げて縫ったり、ゴザを編んだり、砂州でお土産を売ったり。宿泊施設で働く人もいます。ゆったり、のんびりと一日を過ごすのです。ゆっくりと、そしてわずかですが、必要な現金を得ることができるのです。

島いっぱい、広い自然の中で自由に遊ぶ子どもたちの生き生きとした瞳。放し飼いの鶏がピヨピヨとひよこを連れて歩き回っています。学齢期の子どもは全員小学校に通っています。週末には、セブのハイスクールに行っていた子どもが加わります。それから、今は、日本に留学しているジュディスが春休みで帰ってきているんです。

夕方になると縁台を持ち出して、皆でおしゃべりをしたり、ラムを飲んだり、ギターを弾いたり。ほんとうにゆったりとした時間が流れていくのです。宿泊施設に泊まっている海外からのお客さんが、島民と一緒にしておしゃべりをしたり酒を飲んだりしています。平和そのものの暮らしです。暮らしのニーズ(最低限必要なこと)はほぼ満たされ、病気になってもあまり心配はありません……。島民の心はしっかりと結ばれ、そして、それは、しっかりと自然に寄り添った暮らしなのです。

今後のスケジュールとしては、私自身の年齢も考えながら、後 6 年くらい、私がカオハガン島に生活の中心を移してから 20 年目となる 2011 年までに、このプロジェクトを完成させたいと思っています。その後は、島民たちだけの手で、このプロジェクトを引き継ぎ、続けていくことができるように準備を終える、という意味での完成です。

すでに述べたように、いくつかのプロジェクトは、すでにおおかたの形を整え終わり、私たちの手を離れてかなりスムーズに進行するようになっています。

このように、カオハガンの暮らしは、バラ色のように見えます。しかし、私は、これらが、「ほんとうに心を引き締めなければならない大切な時」と思っているのです。

21 世紀の、これからのカオハガンの社会を、暮らしを、どのようなものにしていくのかを、島民たちと一緒にあってしっかりと考えなければならないと思っています。

「貧困とは、金銭を持たないことにあるのではない。金銭を必要とする生活の形式の中で、金銭を持たないことにある」と言われています。基礎的なニーズがほぼ満たされ、これから金銭を必要とし、欲望の広がる暮らしが始まろうとしている時、ここで手を緩めては、カオハガンの人々をこの「真の貧困」のなかに置き去りにすることになるのかもしれない。

そこで大切なことは、カオハガンの人々が、数十年遅れて、今私たちがしているような「金銭やモノだけを目的とするような暮らし」を目指して進んでも、果たして、それが彼等の将来の「しあわせ」に結び付くのかどうかということです。

これは、たいへんに難しい課題です。「金銭を必要とする生活形式が始まるなかで、金銭

やモノを執拗に追い求めるのではなく、金銭やモノにあまりこだわることのない豊かな暮らしを目指す」こと。

私は 14 年の島民との暮らしのなかで、次のようなことが答えであると考えようになっています。それは、島民の「生」がその中にしっかりと根を下ろしてきた「自然と共にある暮らし」、そして、「信頼と互惠性でしっかりと結ばれた社会」を守っていくことです。

それからもうひとつ、いくら諸環境が整っても、島の人口が急激に増加した場合、それを保つことはなかなか難しいという根本の問題も解決しなければなりません。

1 これからの「あるべきカオハガンの暮らし」を島民と一緒に考えたいのです

具体的にはこんなことです。

カオハガンの人たちがずっとそうであったように、「自然の大きな流れのなかにいる自分」をいつも肌で感じ、「自然」を自分たちの都合のいいように変えてしまおうなどと考えないで、その恵みをいただき、シンプルな暮らしをすること。

自然を創造した主(カミ)を敬い、その教え(善意の意思)に沿って生きること。

カオハガンの島民は全員がカトリック教徒ですが、このような、長年^{つちかった}培った自然信仰と交じり合った、すばらしい道德観を持っているのです。

自分たちがずっと続けてきたそんな暮らしを心からすばらしいと思い、外から人ってくるキラキラとした情報、モノに強く惹かれてしまわないこと。

それには、島民たちにいちばん目に入る、外側からやって来た存在の代表である私たちが、上記のような、「島民がずっと続けてきた暮らし」に学んだ生き方をすること。そして、そのすばらしさについて、日常に、島民たちと話し続けること。

今までのように、互いに信じ合い、助け合いながら生きること。

今まで以上に、今ある暮らし、やっとならぬ暮らしを、自分たち自身の手で維持する努力をし、責任を持つこと。

それから、強い意志と能力のある若い人のために、外部の世界を体験し、広い世界へ飛躍する窓をいつでも開けておくことです。上記のような「自然と共にある」という生活の核がしっかりとカオハガンに存在していれば、外部の新しい知識は、島の将来のよりすばらしい暮らし創りに必ず役立つことでしょう。

こんな毎日の暮らしのなかでの目立たない努力を続けながら、日常的に、カオハガンのあるべき暮らしを考え続ける。そして、「カオハガンの 21 世紀の暮らし」を創造したいと思っています。

そして、このような、考え、話し合ったことを、皆でしっかりと共有するために、年に何

回か、現地の言葉で書いた新聞のようなものを出そうと考えています。

2 人口の増加を押さえる工夫が絶対に必要なのです

カオハガン島の人口は 1992 年当時、約 350 人でした。2006 年末には、おそらく 2 倍近くに増えていることでしょう。

島という限られた土地では、人口の増加は通常以上に深刻な問題です。環境が劣悪になることは、近隣のいくつかの島の例を見ても明らかです。

そして、生活、自然、社会関係環境などが良くなればなるほど、当面は、一時的に、人口が急速に増える傾向があります。子どもの数が急速に増える、島から外に出ていく人が減る、外に出ていた人が戻ってくる、人の死が少なくなる、などが原因です。

このことを最大の問題のひとつと考え、セブの医者たちの協力を得て、2 年前から「家族計画」に取り組んでいます。島民たちに基本的な理解を求めるための活動、荻野式バース・コントロール(Natura birth-control)の指導、その他の避妊法などを実施しはじめています。

今すぐにはではなく、しかし、近い将来必ずやってくる大きな問題、「人口の増加」をコントロールすることの大切さを島民とともに真剣に考えていきます。

カオハガン島という、ひとつの、固有の立地、文化をしっかりと掴まえて始まった、この「接続可能な島」の運動は、環境の違ういろいろな「場」での発展、援助を考えるうえで、必ず参考になるものと信じています。

最近では、こんなカオハガン島での活動が、近隣の島にも伝わり、それらの島々でも、少しずつですが、新しい動きが始まっているように感じられるのは、うれしいことです。

* * * * *

カオハガン島での活動の年譜

1987 年

崎山克彦がカオハガン島と、偶然に、出会いました。そして、カオハガン島で何をするべきか、を考え始めたのです。

1991 年

カオハガン島に、「生活の場」を移しました。

1994~8 年

この間、下記のように、カオハガンでの諸活動がゆっくりと進み始めました。そして、

時間と共に、「『持続可能な島』プロジェクト」としてはっきりとまとまってきたのです。

カオハガンでの体験を雑誌に連載を始め、1995 年『何もなくて豊かな島』(新潮社刊)を出版しました。

本を読んでくださった方々が、たくさん島を訪れてくれるようになりました。

宿泊施設「カオハガン・ハウス」(部屋数 7 室)をつくりました。

「NGO『南の島から』」をつくりました。

2005 年現在

たくさんの方々のご協力を得て、島を取り巻く環境が、自律的で持続可能な発展に向かって前進し、このプロジェクトは大きな効果を上げています。

今後は、諸活動が続けるとともに、プロジェクトの運営、推進のほとんどを島民たちだけで行っていけるよう、島民のトレーニング、組織づくりを一層進めます。

2011 年

この年を、その一応の完成の年と考えております。

ここで、カオハガン島の「法的な所有関係」に付いてふれてみます。

1987 年、私がカオハガン島に出会った時、それまでカオハガン島の大部分を所有していたセブ在住の有力者が資金難に陥り、銀行が島を管理しておりました。そして、競売に出されていたのです。私は、フィリピン法人「Caohagan, Inc.」を組織し、その法人が島を買取り、現在も島を所有しています。

このプロジェクトの最終段階においては、新たに創る予定の「島民の組織」にこの法人の一部の株式を譲り、実質的に、カオハガン島の所有者として責任を持ってもらうことを考えています。

「持続可能な島」プロジェクトの運営資金

この「The Sustainable Island Project」は、資金の面でも、私、崎山克彦個人の資金、そして、Caohagan Island Club の会員の方々、友人、知人のサポートによってスタートしました。

現在では、フィリピンの株式会社、「Caohagan Island Club, Inc.(CIC)」と、日本の NGO「南の島から」からの定期的な援助を受けて運営されています。

すでに書いた通り、*印のついたプロジェクトはすでに基礎のシステムができあがりスム

ーズに運営されており、今後、定期的な大きな出費はありません。

これからも引き続き費用のかさむプロジェクトは、「教育、医療」に関するもの、そして新たに企画されるプロジェクトです。そして、この「教育、医療の活動」にかかる費用は比較的大きく、特に、医療の分野は予測がつきにくいのです。

これからも、CIC 社、NGO「南の島から」からのご寄付は継続していただけたと思います。そして同時に、島民たちの自己負担金を増やし、プロジェクトに責任を持ってもらうことをしっかりと実施していきます。村(Balangay of Caohagan)からの費用分担、奨学金を受け卒業し職を得た者からの寄付金、少しずつ余裕の出てきた家庭に一部自己負担をさせる、などのかたちです。それから、本件に当てはまる医療保険を見つけ、適用することも研究してみます。

しかし、当分は、この分野への資金が不足することが考えられます。

そんな状況の中で、2005、2006 年度の、この「教育、医療」関係経費に関して、また、新しい諸活動について、下記のような予算を組んでいます。

	2005 年度	2006 年度
収入		
CIC 社よりの寄付	2,000,000 円	2,000,000 円
NGO「南の島から」よりの寄付	400,000 円	400,000 円
村、島民の負担金	0 円	200,000 円
合計	2,400,000 円	2,600,000 円
支出		
教育関係	1,250,000 円	1,375,000 円
医療関係	2,250,000 円	2,475,000 円
新しい活動企画 (フィッシュ・サンクチュアリーなど)	200,000 円	200,000 円
合計	3,700,000 円	4,050,000 円
<u>差額（不足額）</u>	1,300,000 円	1,450,000 円

この不足額は、当面は、個人、法人よりのご寄付をいただくことで賄うことを考えています。

将来に向かっては、上記の通り、村、島民の負担金などを増やすことを考えております。しかし、資金面での安定を確固たるものにするために、「CIC 社」「南の島から」以外からも、定期的なご援助をいただくことが必要と考えております。

崎山個人の職歴

1959～1963「講談社」勤務。雑誌編集。

1965～1984「講談社インターナショナル社」(国際文化交流のために、主に、日本の文化を英文で海外に紹介する出版社)勤務。営業、編集、版權の売買などを担当。

この間、約 8 年間、アメリカにて勤務。

1972～1976「講談社インターナショナル・アメリカ社」取締役。

1984～1988「講談社インターナショナル社」取締役。編集担当。

1988～1991「マグローヒル出版ジャパン社」(米国マグローヒル社『McGraw-Hill』の日本法人)代表取締役社長。

崎山個人の学歴

1959「慶応義塾大学」法学部法律学科卒業。

1964 アメリカ「カリフォルニア大学(University of California)」バークレイ校、大学院、ジャーナリズム学科で学ぶ。

以上です。